

(2) 動物の概要

平成28年度 外来種調査 動物対象種

通し No.	分類 群No.	分類群	和名	国内の定着段階	リスト 区分等	確認 件数
1	1	哺乳類	アライグマ	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	37
2	2		ハクビシン	分布拡大期～まん延期	重点種	16
3	3		マスカラット	定着初期/限定分布	重点種/特定	0
4	1	鳥類	ガビチョウ	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	119
5	2		カオグログビチョウ	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	1
6	3		カオジログビチョウ	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	2
7	4		ソウシチョウ	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	2
8	1	は虫類	アカミミガメ	分布拡大期～まん延期	緊急種	80
9	1	両生類	ウシガエル	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	98
10	2		ヌマガエル	国内由来	重点種	29
11	1	魚類	ブルーギル	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	4
12	2		コクチバス	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	0
13	3		オオクチバス	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	2
14	4		カダヤシ	分布拡大期～まん延期	重点種/特定	8
15	1	昆虫類	ホソオチョウ	分布拡大期～まん延期	重点種	3
16	2		アカボシゴマダラ 大陸亜種	分布拡大期～まん延期	重点種	76
17	3		クビアカツヤカミキリ	定着初期/限定分布	その他種	2
18	1	陸生節足 動物	ハイイロゴケグモ	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	0
19	2		セアカゴケグモ	分布拡大期～まん延期	緊急種/特定	0
20	3		クロゴケグモ	定着初期/限定分布	緊急種/特定	0
21	1	その他の	アメリカザリガニ	分布拡大期～まん延期	緊急種	88
22	2	無脊椎動物	スクミリンゴガイ	分布拡大期～まん延期	重点種	5

緊急種：総合的に対策が必要な外来種の中の緊急対策外来種

重点種：同 重点対策外来種

その他種：同 総合対策外来種

特定：外来生物法で指定された特定外来生物

環境省が平成27年3月に公表した「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」には、国内由来の外来種等を含む229種の動物が記されている。今回の調査では、このうち以下の22種を調査対象種とした。哺乳類3種、鳥類4種、は虫類1種、両生類2種、魚類4種、昆虫類3種、陸生節足動物3種、その他の無脊椎動物2種である。いずれも県内で見つかったり、あるいは発生が懸念されている種である。

平成28年5～12月まで行った調査の結果は表のとおりである。確認された種は17種。魚類や陸生節足動物は、ルートセンサスなどの一般的な調査にはなじまないためか予想を下回る結果であった。

確認件数が最も多いのがガビチョウで119件。次いでウシガエル98件、アメリカザリガニ88件、アカミミガメ80件、アカボシゴマダラ76件という順である。上位2種のガビチョウとウシガエルは声に特徴があり見つけやすい種ではあるが、今回、水辺の環境を調査したほぼ全域で確認されたアメリカザリガニをはるかに超える確認数になっている。県内でもまん延期に入ったと考えられる。この2種とアカミミガメは、生態系被害防止外来種リストでは「生態系に係る潜在的な影響、被害が特に甚大である」とされている種である。深刻な問題として捉えるべきであろう。

その他の種について分類群ごとにみると、哺乳類ではアライグマの確認数が目を引く。本種は在来の小動物への影響のほか農業被害をもたらす、人家などにも入り込むため対策や駆除が行われている

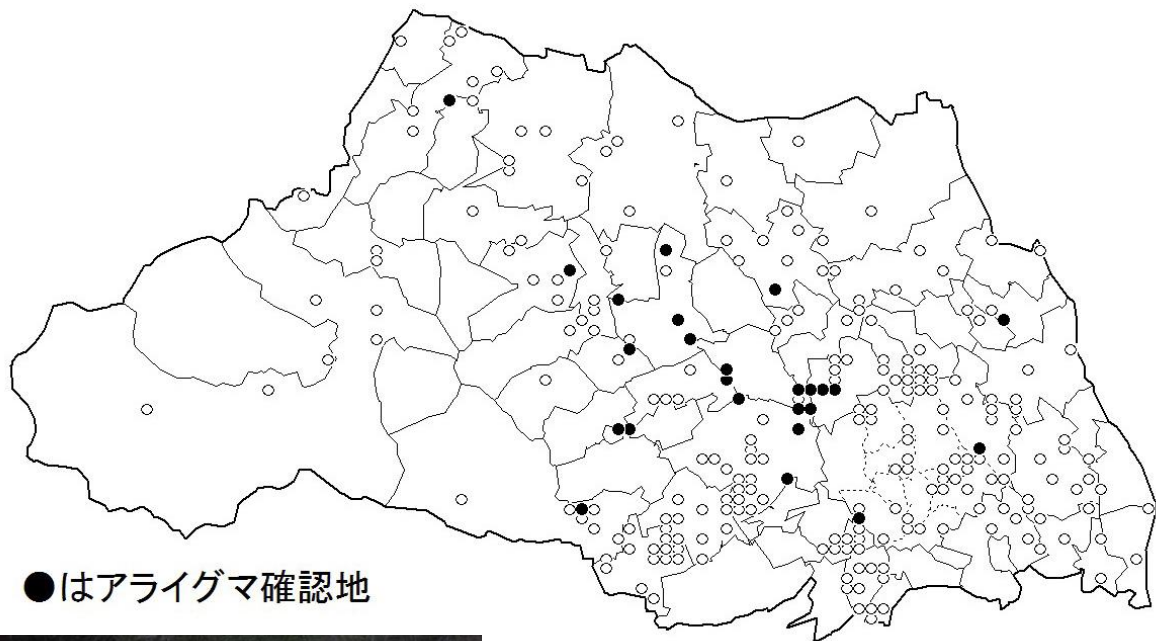
が、依然被害が続いているようである。両生類については、トウキョウダルマガエルなど在来のカエルと競合が懸念されるヌマガエルの確認件数がウシガエルの3分の1近くにもなった。県内での分布に広がりが見られ、また利根川水系での急速な拡大は関東平野の広い範囲への分散が心配される。昆虫類については、アカボシゴマダラが多く場所で確認された。分布拡大はゴマダラチョウにとって脅威である。確認数は少ないが影響が心配されるのが、ホソオチョウとクビアカツヤカミキリである。ホソオチョウは、これまでの観察会等の記録から県西部地域で発生を繰り返していることが明らかになっている。農業害虫でないことから一般に駆除は行われていないようである。樹木の枯死につながるクビアカツヤカミキリは、県内で初めて侵入が確認された4年前と同じ市内で生活痕が確認された。早急に詳細な調査を行い、分布の拡大や果樹園等での被害が起こる前に駆除に取り掛かるべきであろう。魚類については報告件数が少ないが、分布が拡大していることは広く知られているとおりである。その他の無脊椎動物のスクミリンゴガイについても確認数は少ないが確認地が県内に点在しており、旺盛な繁殖力を考えると、継続した調査が必要であることがうかがえる。

以下に、今回確認された外来種の環境別データの一覧表を示す。なお、次ページから記載される動物の各論は、以下の表の記載No順となっている。

### 確認された外来種の環境別データ

No	記載No	種名	A	B	C	D	計
1	1	アライグマ	6	10	18	3	37
2	2	ハクビシン	5	1	3	7	16
3	4	カビチョウ	57	39	7	16	119
4	5	カオグロガビチョウ		1			1
5	6	カオジロガビチョウ		2			2
6	7	ソウシチョウ	2				2
7		カミツキガメ(対象種外)		1			1
8	8	アカミミガメ	2	68	5	5	80
9	9	ウシガエル	7	62	24	5	98
10	10	ヌマガエル(国内由来)		6	23		29
11	11	ブルーギル		1	3		4
12	13	オオクチバス		2			2
13	14	カダヤシ		6	1	1	8
14		グッピー(対象種外)		1			1
15	15	ホソオチョウ	1	1	1		3
16	16	アカボシゴマダラ	32	17	10	17	76
17	17	クビアカツヤカミキリ				2	2
18	21	アメリカザリガニ	6	36	42	4	88
19	22	スクミリンゴガイ			5		5
20		コウライキジ(対象種外)			1		1
21		コジュケイ(対象種外)	2			1	3
22		カムルチー(対象種外)		1			1
23		ヨコヅナサシガメ(対象種外)	2		2		4
		総計	122	255	145	61	583

1 アライグマ(アライグマ科) *Procyon lotor* 特定外来生物 ・ 緊急対策外来種



**分布状況**

各市町村の捕獲実態に比べると報告数が少ないため分布範囲が狭いが、県内に広く生息している傾向がみられた。上尾市からは6月に幼獣の報告があった。県中部でも繁殖していることが確認された。

**環境別報告件数**

水田・休耕地・畑からの報告件数が多かった。次いで河川敷からの報告が多かった。水辺周辺では足跡が確認されやすいためと思われるが、アライグマの生態特性として河川や水路を移動することや水辺周辺で餌を捕ることが多いことも反映されていると考えられる。市街地からは神社の建物に残された爪痕や足跡

雑木林A	6	16.2%
河川敷B	10	27.0%
水田・休耕地・畑C	18	48.6%
市街地	3	8.1%

による確認の報告があった。

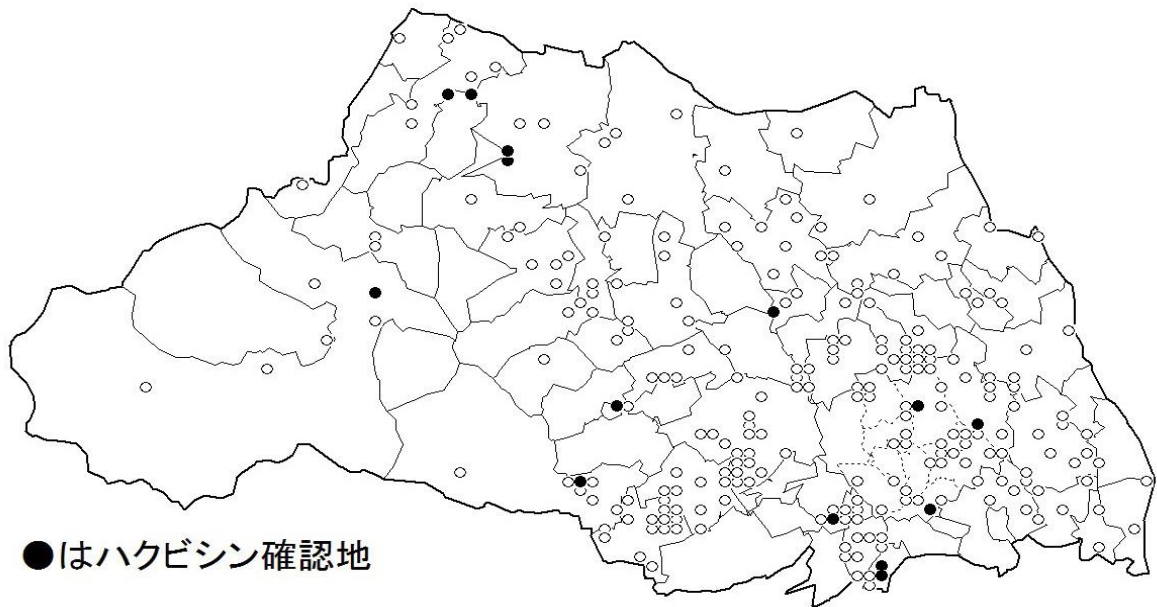
**種の概要**

北米原産のペット由来の外来種。外来生物法（環境省：2004年）により特定外来生物に指定されている。尾のしま模様と目の周りの黒模様が両目につながっているのが特徴である。自然の状態では木のウロなどで繁殖するが、家屋の屋根裏でも繁殖する。在来のタヌキやキツネ、イタチなどと競合し、また、カエル類やトウキョウサンショウウオなどの両生類やフクロウ、サギ類などの鳥類にも影響を与えている可能性が高い。農業被害や住居被害が問題となっている。

**当該種の消長**

日本では1962年に愛知県犬山市の動物展示場から逃亡したのが最初で2006年には47都道府県すべてで確認されている。埼玉県では「埼玉県アライグマ防除計画」に基づき2007年より計画的な防除対策（計画捕獲）を実施している。県内のアライグマ捕獲数は2006年度（450頭）に急増したのち増加を続け、2009年度には2000頭、2014年度には3000頭を超えている。

2 ハクビシン(ジャコウネコ科) *Paguma larvata* 緊急対策外来種



**分布状況**

各市町村の捕獲実態にくらべると報告数が少ないが、アライグマと同様に県内に広く生息している傾向がみられた。

**環境別報告件数**

すべての環境から報告があったが、市街地からの報告が最も多かった。次いで雑木林からの報告が多く、水田・休耕田・畑や河川敷は少なかった。市街地や雑木林からの報告が少なかったアライグマとは異なる傾向が見られた。

雑木林A	5	31.3%
河川敷B	1	6.3%
水田・休耕田・畑C	3	18.8%
市街地	7	43.8%

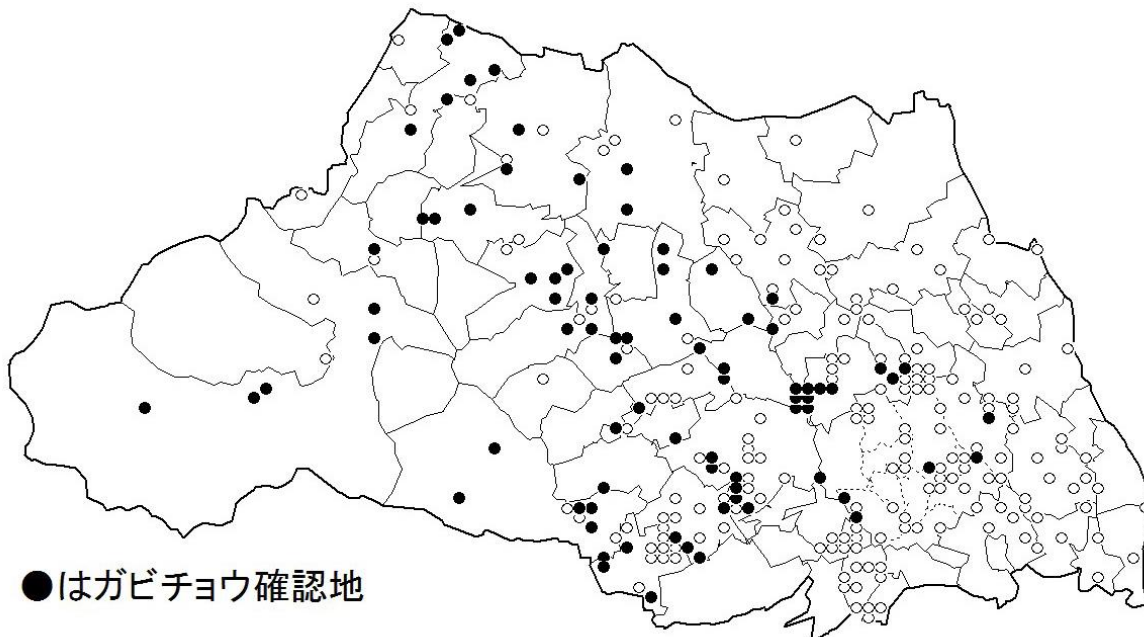
**種の概要**

日本で唯一のジャコウネコ科の哺乳類。名前のように鼻筋には白線があり、頬は白く、目の下にも白斑がある。樹洞などを棲みかになっているが、岩穴やタヌキが使った巣穴なども利用するほか、近年民家の屋根裏や軒下などにも棲みつくことが多く市街地でも増加している。ハクビシンは雑食性で野鳥や昆虫の他、ブドウ、ナシなどの果樹やトウモロコシやトマトなどの野菜も好み、農作物被害が増えている。決まった繁殖期はなく、年に二度繁殖することもある。

**当該種の消長**

昭和20年代には福島や静岡、山梨、四国などに散在的に分布していたが、その後分布域は徐々に拡大し、ほぼ全国的に分布している。埼玉県では、1978年1月に名栗村での交通事故にあって死亡したものが最初の記録であり、青梅市側から埼玉県内に侵入し、秩父地域を中心に分布を拡大したようである。その後、県内全域で生息が確認されるようになった。

#### 4 ガビチョウ(チメドリ科) *Garrulax conorus* 特定外来生物・緊急対策外来種



#### 分布状況

県東部の低地帯からの確認情報が少ないものの、他の地域では広く確認されており、埼玉県全体に広がっていると考えられる。

#### 環境別報告件数

環境別報告件数を見ると、圧倒的に雑木林からのものが多い。河川敷の樹林地にもかなり生息しているようであり、市街地からの確認情報もある。これからも県内広く分布していることがうかがえる。

雑木林A	57	47.9%
河川敷B	39	32.8%
水田・休耕田・畑C	7	5.9%
市街地	16	13.4%

#### 種の概要

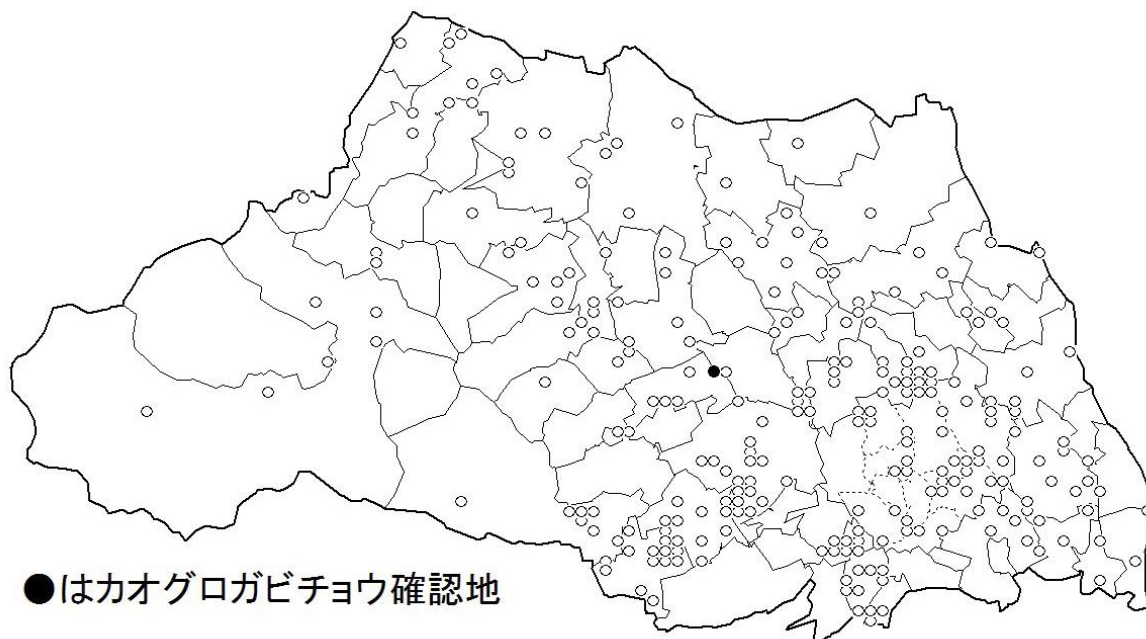
東南アジア原産のペット由来の外来種である。「江戸時代から輸入の記録がある」とされている。1980年代から北九州で観察記録があり最も古いものとされている。下層植生の発達した林に生息しており、モズより少し大きく体色は茶褐色で、目から後ろにかけて白い眉斑が伸びるのが特徴である。クロツグミ、キビタキ、オオルリ、サンコウチョウなどの囀りをまねることもあり、夏季は注意を要する。繁殖期以外でもよく鳴くことが知られている。

#### 当該種の消長

国内では、南東北と西関東から中部にかけての範囲と九州北部に分布している。県内では、10年ほど前から急激に目撃情報が増えている。「外来種ハンドブック」(日本生態学会, 2002)によると、里山の放置による藪の増加がガビチョウに好適な生息場所を増加させたとしている。在来種への影響についての詳細な報告はないが、本種が定着しているハワイでは在来種の個体群密度に影響を与えているようだ。ウグイス、シロハラ、アカハラなど発達した下層植生の中や林内の地上部で活動する在来の鳥類と競合する可能性が指摘されている。

県内に定着してしまった感があるが、引き続き今後の動向を調査することが望まれる。

5 カオグロガビチョウ(チメドリ科) *Garrulax perspicillatus* 特定外来生物・緊急対策外来種



**分布状況**

今回の調査では、1箇所からの報告しかなかった。ガビチョウに比べると県内での分布は広がっていないようだが、過去には比企丘陵や坂戸市浅羽ビオトープでの観察例がある。

**環境別報告件数**

雑木林A		0.0%
河川敷B	1	100.0%
水田・休耕田・畑C		0.0%
市街地		0.0%

ガビチョウ、カオジロガビチョウと同じように藪を好む傾向がある。今回は坂戸市内の河川敷での記録である。

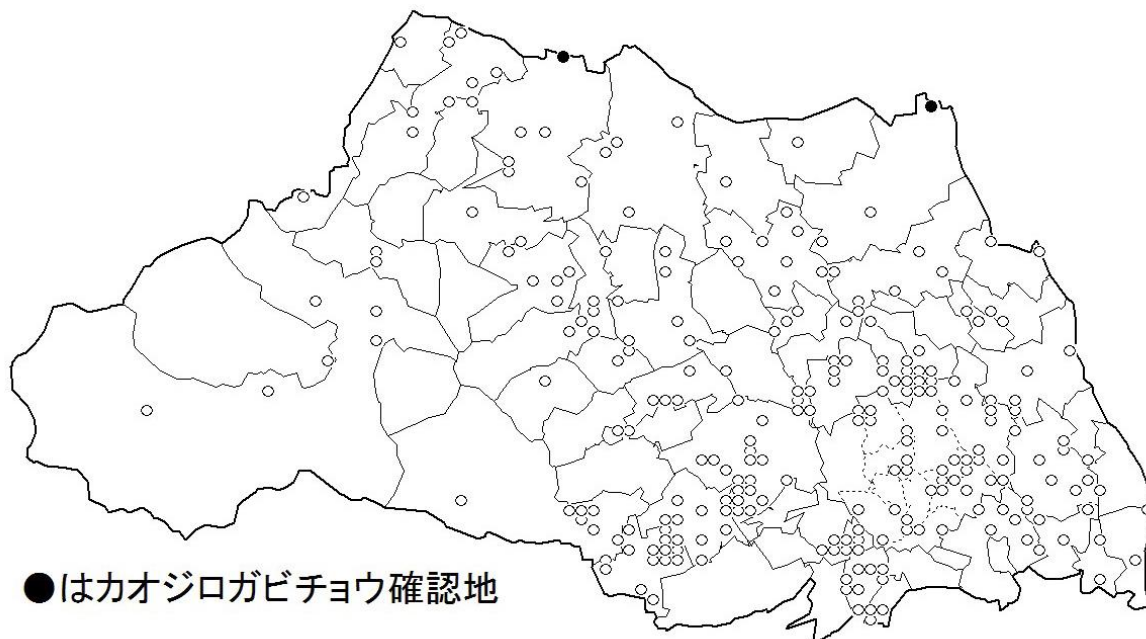
**種の概要**

東南アジア原産のペット由来の外来種である。1980年頃から神奈川県で鳴き声が聞かれており、1988年に三浦半島で初めて観察された。埼玉県での記録も1980年代からと思われる。顔が黒くガビチョウやカオジロガビチョウに比べると一回り大きい。体色もガビチョウの茶褐色とは異なり灰褐色である。

**当該種の消長**

国内では、岩手、群馬、埼玉、東京、神奈川で確認されている。飼い鳥が逃げ出して野生化したものと考えられている。近年は、分布域が縮小しているようで、坂戸浅羽ビオトープでも最近見られていない。

6 カオジロガビチョウ(チメドリ科) *Garrulax sannio* 特定外来生物・緊急対策外来種



**分布状況**

群馬県で多く報告されており、埼玉県内でも北部からの情報がある。今後埼玉県内に徐々に侵入するおそれがある。ガビチョウに似るが声も異なる。

**環境別報告件数**

環境別報告件数を見ると、今回は河川敷からの2件だけであった。本庄市からの報告は利根川河川敷内の樹林地、加須市の報告は渡良瀬遊水地内のグラウンド周辺の植え込みに生息していたものである。

雑木林A		0.0%
河川敷B	2	100.0%
水田・休耕田・畑C		0.0%
市街地		0.0%

**種の概要**

東南アジア原産のペット由来の外来種で、外来生物法による特定外来生物に指定されている。ガビチョウ同様に藪や下層植生の発達した林に生息している。ガビチョウとほぼ同じ大きさで体色は茶褐色、頬が白いのが特徴である。

**当該種の消長**

1994年に群馬県赤城山の南面で確認され、その後分布を徐々に広げ、現在は北関東から千葉県にかけて生息している。県内では、2010年頃から目撃情報が増えている。上野町、加須市、深谷市、熊谷市、北本市での記録がある。

7 ソウシチョウ(チドリ科) *Leiothrix lutea* 特定外来生物・緊急対策外来種



**分布状況**

今回は入間市と鳩山町の2カ所からの報告があった。近県では古くは茨城県筑波山での繁殖記録がある。冬期には低地でも見られることがある。

雑木林A	2	100.0%
河川敷B		0.0%
水田・休耕田・畑C		0.0%
市街地		0.0%

**環境別報告件数**

環境別報告件数を見ると、今回は雑木林からの2件だけであった。本種は藪を好むことから、該当する雑木林はあまり整備されていないことが推測される。

**種の概要**

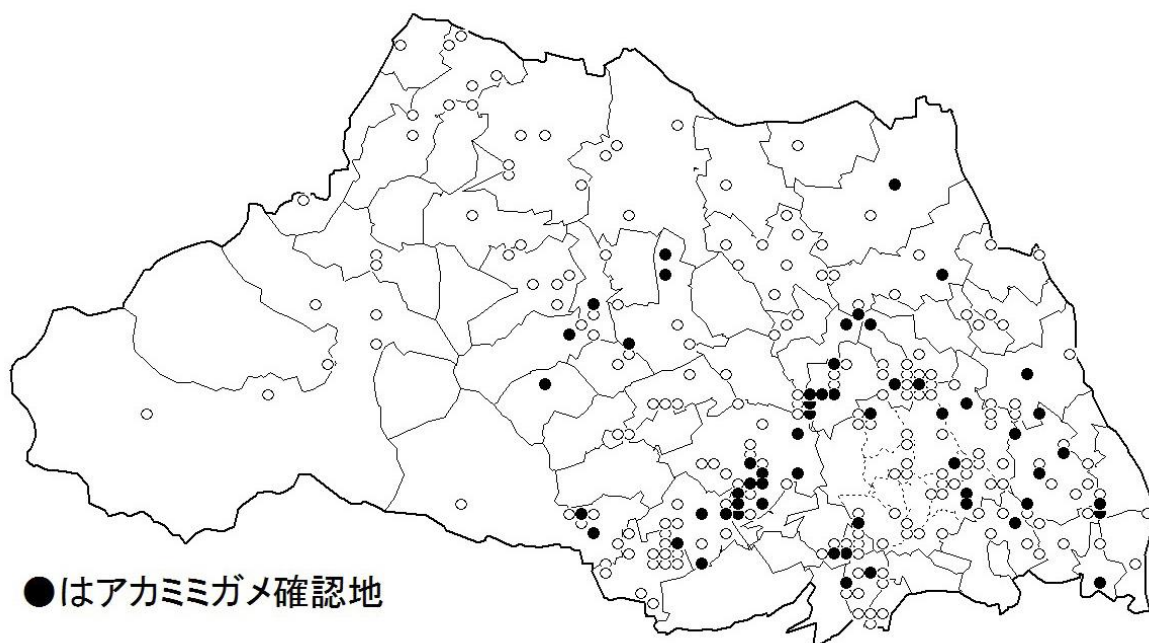
東南アジアから中国南部、ヒマラヤ西部にかけて分布する。スズメほどの小さな鳥で、羽色は大変にカラフルである。江戸時代から輸入されており、1980年代から本州と九州で確認されている。林床にササの発達した林を好んで生息している。中国では昔から飼い鳥になっており、ヨーロッパや北米へ輸出されていた。現在、ハワイやヨーロッパでも定着している。

**当該種の消長**

国内では、主に西日本から関東にかけて生息している。九州では1000mを超える山地の多くで繁殖しているようだ。冬期は低地へ移動してくる。在来種への直接的な影響についての報告はないが、本種が増加することに伴い天敵が近づくことにより、他種鳥類の繁殖に影響が出ているとの見解もある。県内では秩父山系で繁殖していたが、近年ニホンジカによるスズタケの食害により、ササ藪が減少したために生息数は減少傾向にある。



## 8 アカミミガメ(ヌマガメ科) *Trachemys scripta* 緊急対策外来種



### 分布状況

山間部や北部からの報告が少なかったが、利根川や荒川水系の河川敷を中心に県内各地から多くの報告があった。特に荒川水系の上尾市域・川越・川島市町域からの報告が多かった。

### 環境別報告件数

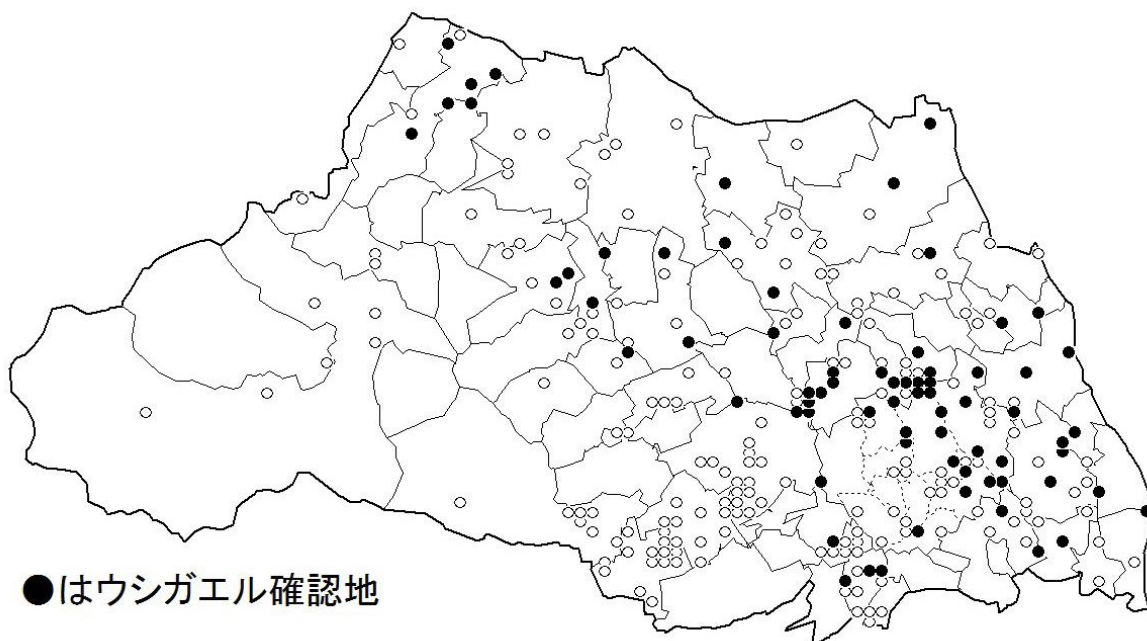
雑木林A	2	2.5%
河川敷B	68	85.0%
水田・休耕田・畑C	5	6.3%
市街地	5	6.3%

圧倒的に河川敷からの報告が多かった。内訳は川や水路内の他、公園の池での報告が多かった。次いで水田・休耕田・畑と市街地からの報告が多かった。

**種の概要** アメリカ大陸原産の外来種。幼体がミドリガメという名称でペットとして大量に販売されてきた。目の後方に鮮やかな赤い線が入ることで、これを耳に見立ててアカミミガメと呼ばれる。流れの緩やかな河川、湖、池沼などに生息し、底質が柔らかく水生植物が繁茂し水深のある流れの緩やかな流水域や止水域を好む。幼体は肉食傾向が強いが、成体では雑食となり何でも食べる。在来の淡水ガメとの競合や餌となる生物への影響が懸念されている。

**当該種の消長** 「外来種ハンドブック」（日本生態学会：2002）によると、1950年代後半から幼体が輸入され、60年代後半から野外で野生化した個体が見つかるようになった。環境省の調査によると、1990年代半ばの年間輸入量は100万匹であったが、近年は10万匹程度。平成25年度の全国の飼育数は約110万世帯で180万匹と推定される。なお、「埼玉県動物誌」（1978）の「帰化動物と埼玉における現状」には、本種は記載されていない。

9 ウシガエル(アカガエル科) *Rana catesbeiana* 特定外来生物・緊急対策外来種



**分布状況**

県西部の山間部を除いて県内から幅広く報告があった。特にさいたま市及び県南や県東部の平野部からの報告が多かった。

**環境別報告件数**

河川敷からの報告が多かった。次いで水田・休耕地・畑からの報告が多かった。雑木林、市街地からの報告も少なからずみられた。

雑木林A	7	7.1%
河川敷B	62	63.3%
水田・休耕地・畑C	24	24.5%
市街地	5	5.1%

**種の概要**

北アメリカ原産の外来種。食用を目的とした養殖のため導入されたが、放逐され、全国の多くの地域で繁殖している。県内では最大のカエルであり、ウシに似た鳴き声が特徴的である。ほとんどのオタマジャクシが越冬してから成体になる。食性は肉食で昆虫やザリガニの他、小型の哺乳類や鳥類、爬虫類、魚類までも捕食するが、在来の生物とくにカエル類への影響が問題となっている。

**当該種の消長**

「埼玉県動物誌」(1978)によると、埼玉県に入ってきたのは1936年頃で、川口市や浦和市が最初の生息地のようなのである。2015年3月に生態系被害防止外来種リストに選定され、日本国内では飼育や販売が原則禁止されたため、本種が流通することはなくなった。また、同法において採捕した本種を生体の状態で採捕地点から異所に運搬したり、その生体を異所に遺棄することや飼育している個体を野外へ放すこともできなくなった。今後の動向が注目される。

10 ヌマガエル(ヌマガエル科) *Fejervarya kawamurai* 重点対策外来種



**分布状況**

県北から県央、県南にかけての利根川流域や荒川流域からの報告があった。利根川・元荒川や荒川沿いに定着していると思われる。

**環境別報告件数**

圧倒的に水田・休耕田・畑からの報告が多かった。水田・休耕田や湿地のほか、庭やサトイモ畑からの報告があった。次いで河川敷からの報告が多かった。雑木林や市街地からの報告はなかった。

雑木林A		0.0%
河川敷B	6	20.7%
水田・休耕田・畑C	23	79.3%
市街地		0.0%

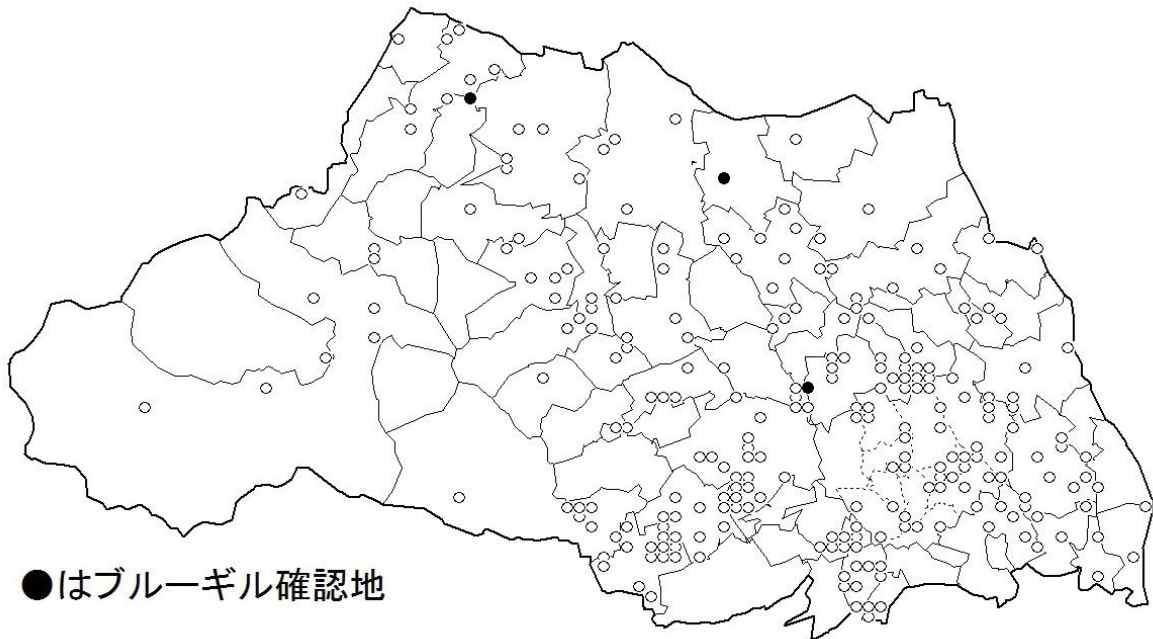
**種の概要**

南方系のカエルで日本、中国、台湾に分布する。日本では本州中部（静岡県）以西、四国、九州、南西諸島に分布が知られている。体長3~5cmの中型のカエルで水田や湿地、河川などの水辺周辺に生息している。繁殖期は4~8月で、産卵場所は水田や沼などの浅い部分や雨の水たまりである。オタマジャクシ(幼生)は高温に強い耐性を備えていて40℃を超えるような夏の水田でも生き残り成長することができる。

**当該種の消長**

1990年代に入って神奈川、千葉、栃木、群馬など関東地方で確認された。侵入経路は不明であるが稲藁や苗、土砂などに混入して非意図的に持ち込まれた可能性が高い。近年の関東地方における分布拡大は、温暖化が一因である可能性も指摘されている、埼玉県では2003年に加須市（利根川水系）で確認され、県北部や県東部でも荒川、利根川、江戸川水系沿いに分布を拡大しているとされる。2004年には県西部の荒川流域の寄居町でも確認されている。特に利根川水系の集団は川に沿って分布を拡大しているとみられ、今後、関東平野の広い範囲に分散することが予測されている。

11 ブルーギル(サンフィッシュ科) *Lepomis macrochirus* 特定外来種・緊急対策外来種



●はブルーギル確認地



分布の状況

今回の調査では、3 地点から 4 件の報告があった。移入の経緯から見ても全国的に分布が広まっている現状では、県内の湖沼等にも多数生息していると推定されるが、魚類調査には難しい面もあり踏み込んだ調査が行われていないものと思われる。

環境別報告件数

本種は魚類であるため、確認は河川敷、水田等水辺環境でのものとなっている。

雑木林A		0.0%
河川敷B	1	25.0%
水田・休耕田・畑C	3	75.0%
市街地		0.0%

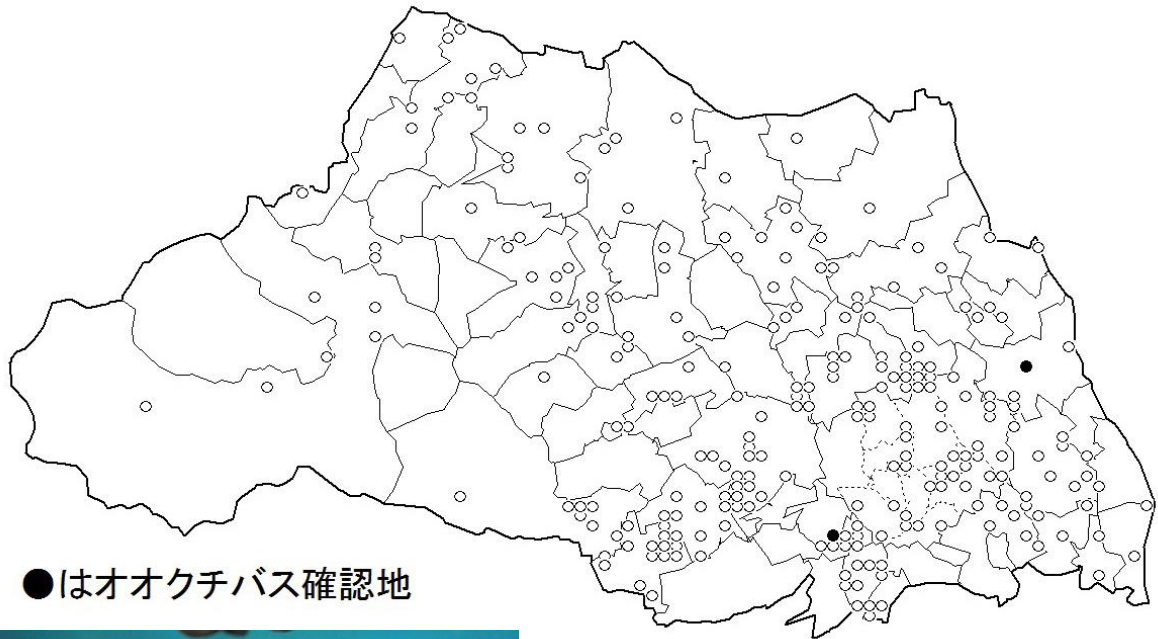
種の概要

ブラックバス類と同様スズキ目サンフィッシュ科に属する淡水魚で、池や湖など水の流れがあまりない水草の茂る環境に好んで生息する。雑食性で、水草などの植物類から貝類、エビ類、小魚、水生昆虫類など何でも食べるため、水辺環境の生態系に多大な影響を及ぼす懸念があることから、特定外来生物に指定されている。

当該種の消長

北アメリカ原産の外来種であり、1960 年（昭和 35）に当時の皇太子殿下が外遊の際シカゴ市長から寄贈されたものを持ち帰ったのが最初で、その後食用魚としての期待のもとに静岡県内の湖に放流された。食用としての需要は広まらなかったものの、その後のバス釣りブームによって、ブラックバスの餌と称して各地の湖沼に放流されたものが繁殖し、全国に分布を広げることとなったと言われている。今では街中の小さな池にも群れをなして泳ぎ回る姿が確認されることも少なくない。ブルーギルが外来種として深刻な問題を起こしていることについて天皇陛下は、2007 年に「このような結果になったことに心を痛めています」と発言している。

13 オオクチバス(サンフィッシュ科) *Micropterus salmoides* 特定外来生物 ・ 緊急対策外来種



分布の状況

今回の調査では、志木市と春日部市から2件の報告があった。バス類については全国的な広がりを見る中で、県内各地の湖沼にも多く分布していると思われるが、魚類の調査は難しい面もありそこまでの取組みができないことによるものと推測される。

環境別報告件数

本種は魚類であり、当然のことながら水辺環境に依存しているため、すべて河川敷環境からの報告であった。

雑木林A		0.0%
河川敷B	2	100.0%
水田・休耕田・畑C		0.0%
市街地		0.0%

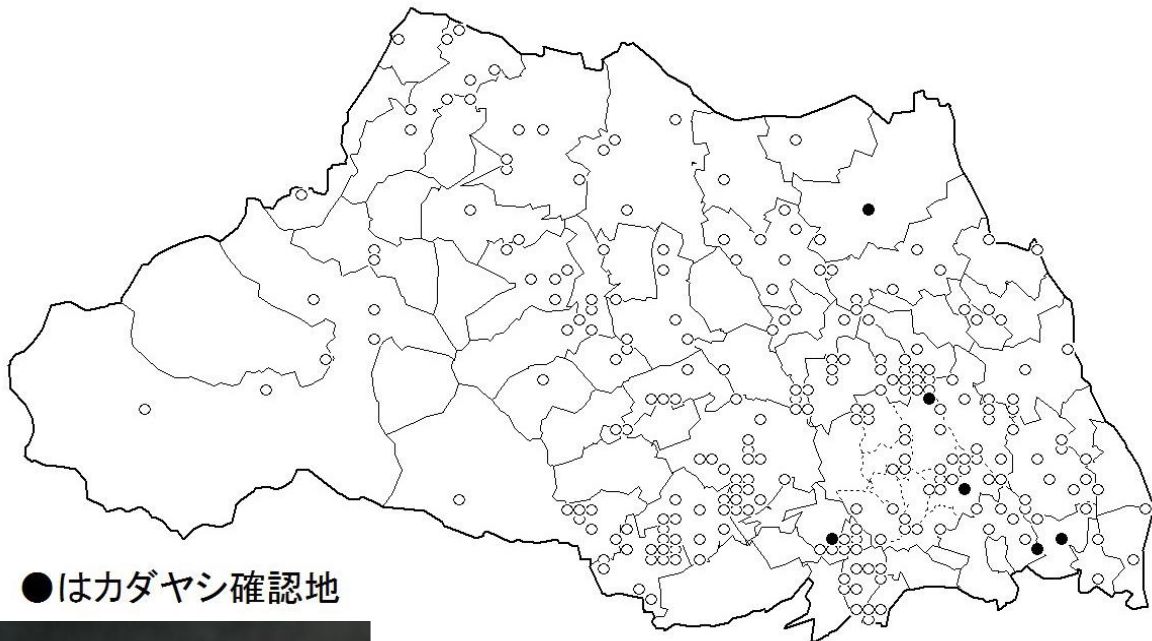
種の概要

スズキ目サンフィッシュ科の淡水魚のうちオオクチバス属に属する8種を「ブラックバス」と呼ぶが、日本にはそのうちオオクチバス、コクチバス、フロリダバスの3種が生息し、いずれも特定外来生物に指定されている。オオクチバスは流れの緩やかな止水域を好んで生息する。食魚性が強いため在来魚を全滅させる恐れがあること、また魚類に限らず、その旺盛な食欲から水生昆虫などの生態に多大な影響を及ぼすことが懸念されている。

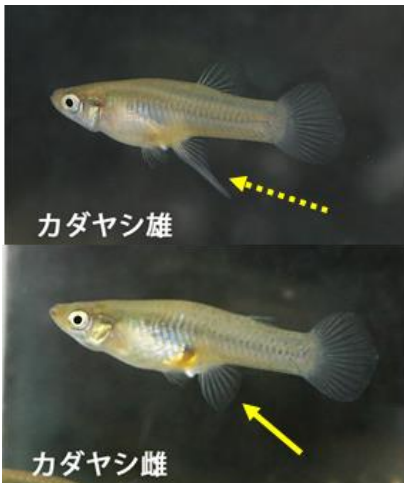
当該種の消長

オオクチバスは1925年(大正14)にアメリカから箱根芦ノ湖に移入されたのが最初である。スズキに似た白身魚としての需要もあったが、何と云っても引きの強いフィッシング対象種として人気を博し、その後あっという間に全国に広まり現在に至っている。インターネットで「埼玉のバス釣り場」を検索すると多くの場所が表示される。それ以外にも、こんなとこまで?という身近な小さなため池や沼でもバスを目当てとした釣り人が入り込んでいるのが現状である。

14 カダヤシ(カダヤシ科) *Gambusia affinis* 特定外来生物・重点対策外来種



●はカダヤシ確認地



雑木林A		0.0%
河川敷B	6	75.0%
水田・休耕田・畑C	1	12.5%
市街地	1	12.5%

分布の状況

今回の調査では、さいたま市見沼区、緑区、加須市、川口市、志木市、草加市からの報告があった。都市部の中小河川で見られるメダカ（ミナミメダカ）と思われたものが本種であることも多いようだ。

環境別報告件数

ブルーギルやオオクチバスと同様に河川敷からの報告が多いが、水田の水路や市街地の小河川と思われるところからの報告もあげられている。今回のモニタリングは、調査対象地を歩きながらの確認が主になるので、魚類の確認データが極めて少なくなっている。県内幅広く分布していると思われるが、魚類の判別は捕獲して調べなくてはならないため他の動物類と比べて調査が難しい。

種の概要

名前の示すとおりボウフラ退治のために導入されたものである。雑食性であるが動物食を好み、自種を含め他の魚の卵や稚魚を捕食する。水槽でメダカとともに飼育すると、メダカのひれを食いちぎることが知られており、自然界で同所的に存在する場所ではメダカに対する捕食圧がかかると考えられている。卵胎生であり、グッピーなどと同様に雌の体内で受精、孵化した仔魚を産む。雌雄の区別点は写真のように尻ビレがポイントである。水面上から背面を見ただけでは、在来種のメダカ（ミナミメダカ）との識別が難しい。メダカよりも汚水に強いとされる。

当該種の消長

1916年に導入された。日本脳炎を媒介するアカイエカ対策として最近まで飼育増殖し、各地で盛んに放流していた。東北以南で分布域を広げており、今後の動向が懸念されている。

15 ホソオチョウ(アゲハチョウ科) *Sericus japonica* 重点対策外来種



**分布状況**

報告件数は3件で、いずれも県西部地域での確認である。このうち2件は同一の調査地コード内で、1か所は食草の自生地で、ここで発生を繰り返し、度々確認されている。残りの1か所はその付近と思われる。これまでの県民参加の調査結果からも県西部以外の確認はなく、発生場所は今のところ限られているようである。

**環境別報告件数**

雑木林A	1	33.3%
河川敷B	1	33.3%
水田・休耕地・畑C	1	33.3%
市街地		0.0%

雑木林、河川敷、水田等の3か所で確認された。食草に強く依存し生息していることから、雑木林と水田等で確認という報告は、当該環境の近くに草地があり、そこでの確認と思われる。

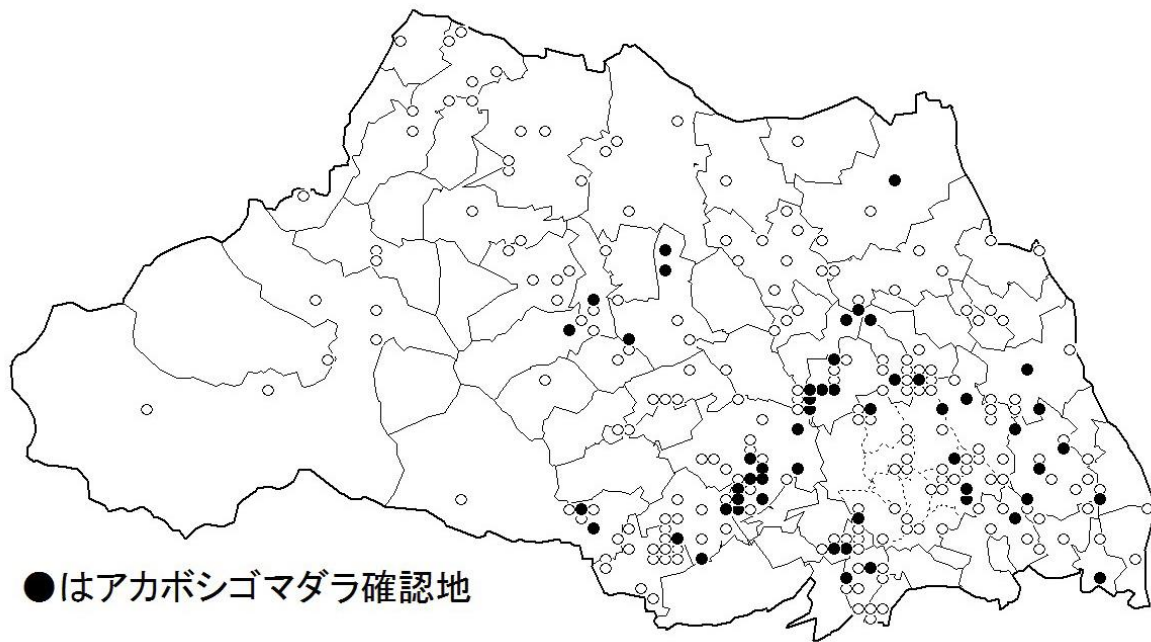
**種の概要**

元来、日本には分布しない、外来種（放蝶によるものと考えられている）。成虫は年3~4回発生。アゲハチョウよりかなり小さく、♂は白地に黒の縞模様。後翅に赤斑がある。♀の翅は黒っぽい。後翅にある尾状の突起が細く長い。食草（ウマノスズクサ）のある草地や河川敷などを緩やかに飛ぶ。食草がジャコウアゲハと同じであることから、競合が懸念されている。

**当該種の消長**

1978年に東京都で確認されてから、現在は東北から九州に至る各地で記録されている。一時的な発生にとどまる場合もあるが、県内では、近年、狭山丘陵や奥武蔵、越生町など県西部地域で度々確認され、観察会では成虫はもちろん幼虫も観察されている。移動性が低く、農業害虫ではないことから駆除されることはなく、特定の地域で発生を繰り返し、付近に拡大していることが考えられる。今のうちに発生地を特定し、早期の駆除とモニタリング調査を行うべきであろう。

16 アカボシゴマダラ(タテハチョウ科) *Hestina assimilis assimilis* 重点対策外来種



**分布状況**

今回の調査では 76 件の確認報告があった。調査地が県中央・東部・西部地域に多いこともあるが、同地域で広く確認されている。県北部・秩父地域から報告はなかった。確認された場所は低地帯から低山帯にわたり、またこれまでの県民参加の調査結果などからみて県内全域に分布が広がっていることが想像できる。環境適応性の高さと、食草のエノキが、野鳥によって種子散布され、どの環境にも生育していることが分布の拡大につながっているものと考えられる。



**環境別報告件数**

食草とのつながりから雑木林での確認が多いのは当然であろう。他の環境においては大きな差がなく発生しており、環境による偏りはあまり見られない。ここからも食草があればどのような環境でも適応することがうかがえる。

雑木林A	32	42.1%
河川敷B	17	22.4%
水田・休耕地・畑C	10	13.2%
市街地	17	22.4%

**種の概要**

在来種は奄美大島、徳之島、喜界島に分布。本種は中国産亜種（大陸産亜種）で、1998 年以降、分布を拡大。食草はエノキで、成虫は年 3 回程度発生。急激な増加によってもともと類似環境に生息するゴマダラチョウと生態的に競合するのではないかと懸念されている。後翅外縁に赤い斑紋が出るのが特徴であるが、春型では著しく白化した個体も出現することもあり、ゴマダラチョウと紛らわしい。

**当該種の消長**

平成 22 年度から 25 年度までの「県民参加生き物モニタリング調査」では毎年確認情報が寄せられ、25 年度の確認情報は 22 年度の 2.5 倍を超えた。観察会を開催する団体からも普通に見られるようになったとの声もあり、県内全域で、市街地から山間部まで生息し、拡大から定着そしてまん延期に入った可能性が考えられる。なお、今回の調査では県中央・西部・東部地域の 9 地点で幼虫も確認されている。



17 クビアカツヤカミキリ(カミキリムシ科) *Aromia bungii* その他の総合対策外来種



クビアカツヤカミキリ (韃州HPより)

**分布状況**

報告件数は2件、いずれも同一市内での成体ではなく生活痕の確認である。一般に、幼虫時、樹木に穿孔するカミキリムシの発見は難しく、本種も同様といえる。今回の確認はフラス(木くず等)と思われる。これまでの県民参加の調査結果から他市町村での確認事例はない。

**環境別報告件数**

雑木林A		0.0%
河川敷B		0.0%
水田・休耕田・畑C		0.0%
市街地	2	100.0%

市街地での確認である。本種が食入・加害するサクラやモモ、ウメ、ザクロ等といった樹種は植栽により市街地でも容易に見られることから、同地での確認と思われる

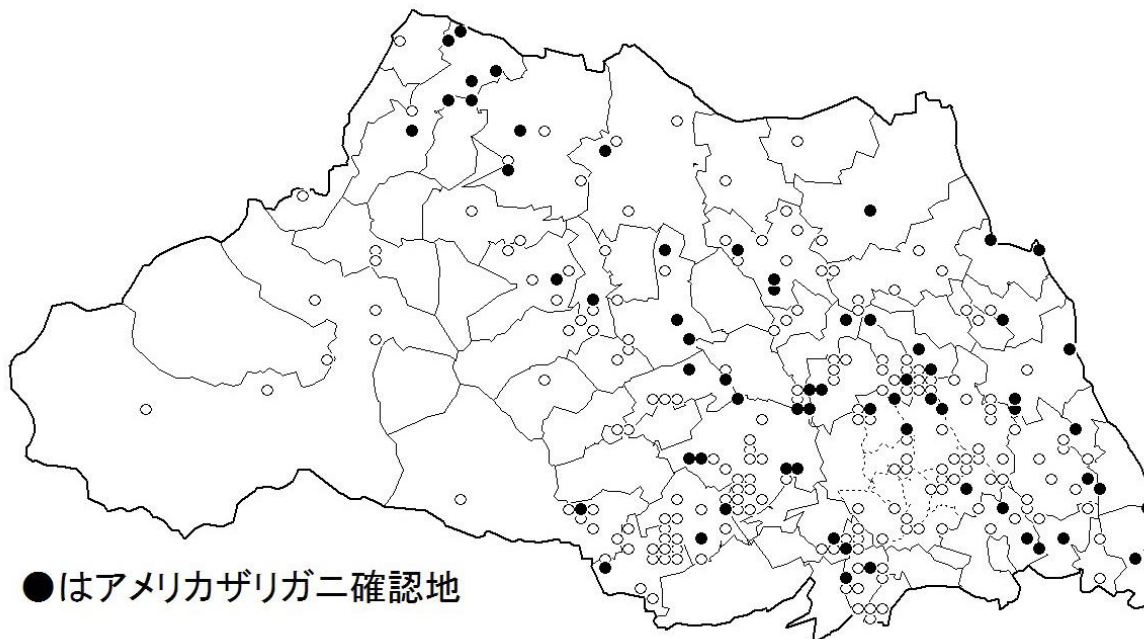
**種の概要**

中国、モンゴル、朝鮮半島などに生息する。成虫の体長は約2.5~4センチ。国内での発生個体は首の部分(前胸背板部)が赤く、他の種との見分けは比較的容易である。幼虫が生木に入り、樹木内で2~3年で成長し蛹となり、夏に成虫になり樹木の外に出ると考えられる。国内での生態については、確認数などが少なく知見の集積が必要といわれているが、寄生植物を衰弱、枯死させる重要害虫で、発見次第、捕殺することが必要である。

**当該種の消長**

2012年に愛知県海部地域で初めて確認され、2013年に埼玉県草加市、2015年に群馬県、東京都、大阪府、徳島県の4都府県で発生し、防除が試みられている。徳島県では果樹園内で広範囲の被害になった。2016年には栃木県でも侵入が確認されている。今後も新たな発生が続くと思われ、発生地においては、早急に関係地域自治体と連携し、駆除対策を講じ、同時にモニタリング調査を行うべきであろう。

21 アメリカザリガニ(アメリカザリガニ科) *Procambarus clarkia* 緊急対策外来種



分布の状況

今回の調査では、64 地点から 88 件の報告が寄せられた。全国的に分布を広げていることもあり、河川や水田などの水辺環境を調査している地区ではほぼ全域で確認されていると思われる。

環境別報告件数

本種は水辺に強く依存する生き物であり、当然のことながら河川敷や水田等での確認が約 88%で、雑木林や市街地からの報告もあるが、水路や池等での確認と思われる。

雑木林A	6	6.8%
河川敷B	36	40.9%
水田・休耕田・畑C	42	47.7%
市街地	4	4.5%

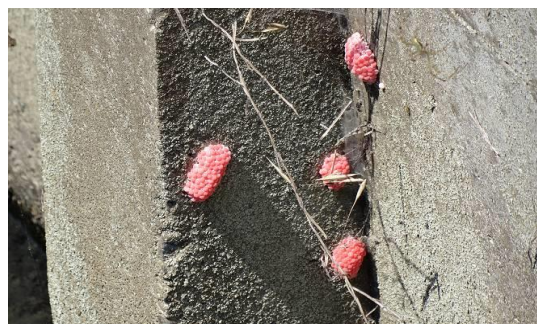
種の概要

大きなカニのようなハサミを持つことからザリガニという名称が付いているが、十脚目アメリカザリガニ科のエビの仲間である。水田、ため池、河川などの水辺に広く生息し、多少の水質の悪さなど気にせず汚れた水域にも平気で生息している。雑食性で小魚や水生昆虫などの生態系に影響を与えるほか、稲苗を食べたり畔に穴を開けたりして農家からは嫌われものとなっている。

当該種の消長

アメリカザリガニは北米原産で、19327 年（昭和 2）に食用ガエル（ウシガエル）の繁殖用の餌として持ち込まれたのが最初で、その後急速に各地に分布するようになった。繁殖池から逃げ出したこともあるが、それ以上に人為的に各地に持ち込まれたものと推定されており、祭りや縁日の屋台などでよく売られ、ペット化したことがその要因のひとつと言われている。外来生物法では特定外来生物ではなく、要注意外来生物に指定されていたが、今回策定された「生態系被害防止外来種リスト」では緊急対策外来種となっており、実効性のある対策が期待されている。

22 スクミリンゴガイ(リンゴガイ科) *Pomacea canaliculata* 重点対策外来種



雑木林A		0.0%
河川敷B		0.0%
水田・休耕田・畑C	5	100.0%
市街地		0.0%

分布の状況

今回の調査では4地区から5件の報告が寄せられている。今のところ広範な拡散は確認されておらず、地域的な偏りも特になく県域に点在している現状であるが、旺盛な繁殖力を考えると今後の動向に注視が必要だろう。

環境別報告件数

本種は貝類であり、水田などの水辺環境に依存することから、すべて水田等の環境から報告されている。

種の概要

別名「ジャンボタニシ」と呼ばれるような大型の巻貝で、主に水田や水路に生息する。初夏から秋にかけてが繁殖期で、卵は水中ではなく稲の茎や水路の壁などに鮮やかなピンク色の卵塊として産み付ける。卵塊はワックス質に覆われていて硬く、乾燥や雨などから守られるようになっている。本種は草食性が強く、大量に発生することで農作物への食害が懸念されている。

当該種の消長

スクミリンゴガイは中南米原産の外来種で、日本には1980年代に食用として移入され、一時期全国で盛んに養殖されたが、需要がないことから養殖が廃業になるに伴って廃棄され、野生化して現在に至っている。南方系の種のため北日本の冬は越せず分布は広がっていないが、温暖な西日本を中心に爆発的に繁殖しており、埼玉県内でも広がりを見せ始めている。